
来日英国人ハーバート・ジョージ・ポンティングの写真に見る日本の工芸職人
——アメリカ人女性ジャーナリスト、シドモアとの比較を中心に——

矢島真澄美（東北大学）

1901年、英国人写真家ハーバート・ジョージ・ポンティング(1870-1935)は、ステレオ写真や雑誌の出版社からの依頼を受け日本を訪れた。彼は、野外における撮影に長けていた風景写真家であったが、京都では伝統工芸の工房内における細かな作業の様子も写真に収めていた。それらの室内の写真からは、現像、焼きなどを含め優れた写真技術をもって機材を操作していたことが確認できる。ポンティングについて、彼の写真を中心にその表現などを分析した研究は現在見つかっていない。そこで本発表では、1880年代に来日したジャーナリストで写真家のエリザ・ルアマー・シドモア(1856-1928)を比較の対象とし、工芸職人へ向けたポンティングのまなざしの特徴を明らかにしていく。

明治時代、日本は日本製品を宣伝する目的で海外の博覧会に積極的に参加し、高い評価を受けていた。その要因としては、ウィリアム・モリス(1834-1896)の思想を軸としたアーツ・アンド・クラフツ運動やクリストファー・ドレッサー(1834-1904)によるジャポニズムの影響が考えられる。そして、これらの思想には工芸品のみならず、製作に関わる職人へ向けた視点も含まれていた。

1884年来日したシドモアの記述やスケッチからは、先に述べた思想の影響がみられる。彼女は、創造力を用いて作品をつくるのではなく、西洋人に媚びるように華美な装飾を施す職人たちを批判した。そこには、美の備わった日用品の重要性を唱えたモリスの思想と、美を意識せずに作品を作るべきではないと考えるドレッサーの思想が反映されていたといえる。創造力を用いた作品作りへの姿勢と、伝統ある巧みな技こそがシドモアにとっての芸術家の定義であった。

これに対してポンティングは、独自の視点で被写体を解釈し、表現しようと試みた。たとえば、七宝作家並河靖之(1845-1927)を肖像写真として写し出すことで、芸術家としての並河のみならず、彼の人間性までも表現した。ポンティングは、並河の表情から、並河の精密で緻密な技術と、美に対して貪欲な精神を表すことに成功したのである。被写体の表情に秘められた無数の情報は、陰影という方法を用いて撮影者によって引き出された。このような撮影者の姿勢は、最小限の道具で美しい形を作り出すために神経を研ぎ澄ます工芸職人に通じるものである。それが、ポンティングが考える芸術家の条件だった。

以上のことから、ポンティングは彼自身については、撮影機材を操作する芸術家であると考え、伝統工芸の工房で見た職人たちの姿に自らを重ね合わせていたといえることができる。それは、シドモアなど先人たちとは異なった独自の視点であったことを意味するといえるだろう。